

# 誰一人取り残さない

## —子どもの貧困問題を考える—

### ◆全体討議

二〇一八年二月十三日、西本願寺において第五回六条円卓会議が開催されました。

六条円卓会議とは、宗門内外の有識者の知見を得つつ「自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現」（宗制）に、宗門がどう貢献できるかを具体的に模索するために設立された会議です。第五回六条円卓会議では、「誰一人取り残さない——子どもの貧困問題を考える」をテーマに、埋橋孝文氏（同志社大学教授）と

村井琢哉氏（NPO法人・山科醍醐こどもひろば理事長）をお招きし、「ご講義をいただきました。その内容については『宗報』（二〇一八年八月号）において報告しました。

今号では、講義を受けて行われた全体討議の内容について報告します。なお、全体討議は学識経験者を中心とした宗門内外の有識者で構成される会員を交えて行われました。

### 子どもの貧困の現状について

全体討議ではまず、「子どもの貧困の現状」を問う質問が寄せられました。

二〇一五年に実施された厚生労働省の

調査（国民生活基礎調査）によれば、子どもの貧困率は一三・九％と、過去の調査（二〇一二年）に比べてわずかに減少しました。以前は六人に一人が貧困と言われていましたが、現在では七人に一人とされています。「この現状を改善傾向

と捉えて良いのか」という質問に対して村井氏は、子どもの貧困率は、確かに減少傾向にあるが、貧困の現状をつぶさに見ると「子どもたちの生きづらさは変わっていない」と指摘されました。さらに、貧困問題が大きく注目されている昨今においても、貧困家庭へのバッシングは多く、周囲のまなざしは相変わらず厳しい現状があると説明されました。

村井氏によれば、現代の子どもの貧困の特徴は、戦後間もない日本が経験したような、多くの人びとに十分な食べ物がなく、職もないといった状況とは異なり、皆が当たり前に経験していることを「自分だけ」経験していない状況のなかで問題が生じていることにあるということです。その具体例として歯磨きの例が紹介されました。貧困家庭の子どもたちの中には歯を磨く習慣が身についていない場合があり、歯磨きができない子がいるそうです。そうすると、ひどい虫歯になってしまったり、そうした状況を集団生活の中で他の子からかわれたりす

ることで、貧困家庭の子どもが辛い経験をすると言われました。こうした子どもたちには、「綺麗に歯磨きしよう」という、私たちには一見当たり前に見えるようなことをイベントに取り入れるそうですが、非常に高い効果があると指摘されました。

現代では子どもたちの多くがレストランでの食事やバーベキュー、海水浴や塾通いなどの経験があるのに対して、貧困家庭の子どもたちはそれらの経験がないことも少なくないと言われています。子どもの貧困問題では、子どもたちの「当たり前」の埋め直しをどれだけできるかが対策の一つとして求められているという点を村井氏は強調されました。

## 問題を抱えた子どもたちとどのように出会うか

子どもの貧困問題の難しさの一つとして、貧困状態にある子どもたちを外見からは判断しづらいという点が挙げられます。

す。これは、日本で問題となっている「貧困」は、命の危機に瀕するほど衣食住が欠如する状態を指す「絶対的貧困」ではなく、「相対的貧困」という状態を指していることが大きな理由として挙げられます。また、子どもたち自身も、「お父さんやお母さんに迷惑を掛けたくない」などの理由から、家庭に問題を抱えていることを家庭外、例えば地域の大人や学校の友だちなどには隠そうとしていると言われています。このような現状のなかで、問題を抱えた子どもたちと出会うにはどうしたらいいのか、ということとは参加者の多くにとって共通の問題でした。

埋橋氏は、対応しようとする子どもを限定することで、逆に子どもたちが参加しにくい状況を作り出すこともありうるため、貧困層にターゲットを絞る取り組みではなく、広範囲に呼びかけを行い、つながりを形成していくなかで問題を発見し、対応していくという活動方法が重要であると述べられました。このように

## 埋橋孝文（うずはしたかふみ）



一九五一年生まれ。同志社大学・社会学部・社会福祉学科教授。京都大学教育学部卒業。関西学院大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士（経済学）。専門は社会福祉学。大阪産業大学経済学部、日本女子大学人間社会学部を経て、二〇〇五年より現職。著書に『社会福祉の国際比較』（放送大学教育振興会、二〇一五年）、『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅠ…理論的アプローチと各国の取組み』（共著、ミネルヴァ書房、二〇一五年）、『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅡ…社会的支援をめぐる政策的アプローチ』（共著、ミネルヴァ書房、二〇一五年）などがある。

貧困問題に関する活動考えた場合、お寺には子ども会や日曜学校、キッズサンガやサマースクールなど、子どもたちとの接点をすでにもつ活動が多くあるため、そうした活動を継続しながら、子どもたちとの関わり合いの中からできることを見出し（みいだ）ていくことが大切ではないか、という意見が参加者から提案されました。

埋橋氏はさらに、社会的に孤立してしまふと貧困から抜け出るのは困難になると言われ、貧困の克服には他人との「つながり」が大きな力になりうると指摘されました。それは、例えば、地域のネットワークを通じて子どもたちが様々な人と接するなかで、子どもたちが「こういうお兄ちゃんやお姉ちゃんになりたい！」「こういう大人になりたい！」と思える身近な人がいることが、子どもたちにとっては実は大きな刺激になり、貧困を乗り越えていく力にもつながっていくのだと紹介されました。

一方村井氏は、「問題を抱えた子どもたちとどのように出会うか」という問いに対して、集団で活動している時に一人だけ特徴的なコミュニケーションをとる子どもが見受けられることを紹介され、周りの子どもと比べて異質に感じたことを「サインの一つ」として見逃さず、経済的な事情や発育の問題など、子どもそれぞれ異なる背景を発見するのが第一であると述べられました。また氏は、お寺にもっと地域の「結び目」の役割を担（に）ってほしいと要望されました。その理由の一つとして、かつてお寺が担っていた「結び目」の役割を、現在ではコンビニに奪われているのではないか、という問題提起をされながら、コンビニでは、認知症の方が来られると、地域包括支援センターに連絡をしてサポートしたり、非行少年が来たら対応を行うこともある、という実例を紹介されました。さらにコンビニは生活用品があり、生活のために人がやって来るが、「現在のお寺は普段使いがしづらい空間になっているよ

うな印象を受けます」とも述べられました。

村井氏が理事長を務めるNPO法人・山科醍醐<sup>やまなかだいご</sup>こどものひろばでは、しばしば本願寺山科別院の会議室や駐車場を利用されるそうで、NPOのスタッフや子どもたちは日頃の交流のおかげで、お寺を身近に感じられるようになったそうです。氏は「お寺は非日常空間だから、特別な雰囲気<sup>ふんいき</sup>を作り出すことができ、子どもたちに貴重な経験を提供できる場でも

あります」と述べ、地域住民との接点を生み出し、貴重な経験を提供する場としてのお寺の役割に期待を寄せられました。

## 多様な人びとの連携

日本社会において「子どもの貧困」が取り沙汰<sup>さた</sup>されるようになった二〇〇八年以降、全国各地で様々な支援の輪が形成され、広がっています。子どもの貧困問

題解決のためには、多様な人材を抱え、寺院本堂をはじめとする施設を多く有している宗教団体に対して、様々な立場の人びとや諸団体と連携していけば、貧困解決により効果的な取り組みが行えるのではないかと、という一般の方々からの意見も少なくありません。このような中で、寺院や宗門は今後どのような人びととどう連携し、協働することが可能でしょうか。

## 村井琢哉（むらい たくや）



一九八〇年生まれ。NPO法人・山科醍醐<sup>やまなかだいご</sup>こどものひろば理事長。社会福祉士。関西学院大学人間福祉研究科修了。大学院修了後、京都府庁での協働コーディネーター、公益財団法人京都地域創造基金にも携わりながらこどものひろばの活動に関わり、二〇一三年に理事長就任。子どもの貧困に対する実践を中心に年間約七十か所で啓発活動や各地の活動のサポートや講演を行う。公益財団あすのば副代表理事、京都子どもセン

タ―理事、京都府子どもの貧困対策検討委員、内閣府「子供の未来応援国民運動」の発起人。

スクールカウンセラーとして学校に携わ<sup>たずさ</sup>っている参加者の一人からは、「学校は家庭の事情に詳しいが、情報漏洩<sup>ろうえい</sup>の観点などから連携が困難である」との意見も出されました。この意見に対し、埋橋氏は、学校と直接的な連携が困難な場合、スクールソーシャルワーカーなどに相談することを勧められました。スクールソーシャルワーカーは、学校での困りごとを抱えている子どもと家族を支えるための福祉の専門職で、現在、全国的に少しずつその数を増やしています。以前は家庭訪問などで教員が対応を行って

ましたが、教員だけでは解決が難しくなってきた家庭内の問題解決のため、児童相談所などと協力して支援を行っていると言われました。

貧困問題への対応を考えた場合、様々な問題が挙げられ、一寺院だけでは負担が大きく、どのような取り組みを始めたらいいいのかわからない、という意見も出されました。しかし、埋橋氏が指摘されたように、児童の状況や対応に詳しいスクールソーシャルワーカーなどの専門家や役場、民生児童委員や地域住民などと密に連携することで、課題を発見し、子どもたち一人ひとりに合った対処法を見出すことができます。地域の現状を知り、様々な方々と連携・協力する中で、地域の現状を知り、現状に即した活動を見つけていくことが重要なことであると考えられます。

## 念仏者としての取り組み

では、念仏者としてどのような具体的

な取り組みが考えられるのか。参加者の一人は、ご門主の「念仏者の生き方」でのお示しを踏まえて、「仏さまのような執<sup>しつ</sup>われのない完全に清らかな行いはいできないが、そのお心にかなう生き方をさせていただく中で、子どもの貧困問題の解決に向けた活動を行うことが大事ではないか」と述べられました。他方、僧侶として貧困問題に取り組む時、対処療法的に「ばんそうこうを貼る」だけではなく、貧困そのものを生み出す社会の構造的要因を捉え、根本的な解決に向けた取り組みが不可欠だという意見も出されました。

村井氏は、社会問題は女性や子ども、高齢者などの最も弱い立場の方々のところに表出する傾向があると指摘され、貧困問題の構造的要因がどこにあるのかを見極める必要性を語られました。その上で、「多様な質のばんそうこうができることで、少なくとも血が流れることはありません」と述べられ、ばんそうこうを貼り続けながら、気づいたことを周囲の

人や地域の人に伝えていくことで、社会の流れを変え、政治における政策的な転換につなげていく必要があると言われました。

社会の流れを変えたいということについて、参加者から「法話などの場を利用して価値観の提唱をすべきである」との意見も出されました。埋橋氏によると、ある学校で、貧困問題を抱えている家庭の児童が、「自分の存在が家庭の負担になっている」と責任を感じていたことがあったそうです。自分が生まれてきたことで、家庭の生活費が増え、結果的に親に迷惑を掛けていると感じていたのです。しかし、学校の先生がその児童に対して、「君の家庭が経済的に苦しいのは君の責任ではない」と声掛けしたことで、児童は元氣を取り戻したそうです。埋橋氏はこの事例をもとに、「僧侶は法話を通して世の中に訴える力があります。そうした場を利用してぜひ、世の中の価値観を変える言葉を発していただきたい」と述べられました。（本願寺派総合研究所）

## 閉会あいさつ



本願寺派総合研究所長 丘山 願海

本日はお忙しい中、埋橋先生、村井先生より貴重なお話を頂戴し、誠にありがとうございます。また、遠近各地よりご参加いただいた会員の皆さまにも感謝申し上げます。

私は昔から、この世界から不平等と戦争を無くしたいという思いを持ち続けています。本日のテーマである「子どもの貧困問題」はまさに不平等の問題とも言えるでしょう。貧困問題が生じる背景には、「自分さ

えよければ」「自分さえ豊かならば」という大人たちの自己中心的な生き方があると思います。こうした感情が蔓延する社会において、大乘仏教の基本的な精神である「自分以外の他者と共に生きる」ということの重要性をますます実感します。ご門主は、「阿弥陀さまの救いのおこころを知らされた私であるからこそ、他の方の悲しみや苦しみに無関心ではいられません」（平成三十年 御正忌報恩講 ご親教）と述べられました。今この地球上のどこかで、悲しんだり苦しんだりしている人がいる。「共に生きている人たち一人ひとり」への思い。それを忘れて身勝手な生き方をしているのは、貧困問題も解決

が難しいのではないのでしょうか。

共に生きる人たちへのまなざしをもっと鋭くしていかなければならない。そうしたまなざしが、これからを担っていく子どもたちの支えになるのではないかと思いました。

本日は、本当に多くのことを学ばせていただきました。これからがスタートです。更に議論を深めていかなければいけません。今後は、宗門内の様々な立場の方たちや、他宗派の方々も巻き込んで一緒に問題を考え続けていきたいと思っております。